

自己有用感を持つ児童の育成

～特別活動における係活動の工夫を通して～

豊見城市立豊見城小学校教諭 宮 里 の り か

I テーマ設定の理由

現在の社会は、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、複雑で予測が困難な時代となっている。このような時代において、『小学校学習指導要領解説総則編』では、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと」や「急速な社会の変化の中で、一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識できる自己肯定感を育むなど、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。また、児童生徒が社会で生きて働く力を育む活動となる特別活動においては、この変化の激しい社会の流れを受け、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を指導する上での重要な視点としている。『小学校学習指導要領解説特別活動編』（以下、『解説特別活動編』）によると、「児童は学級や学校という社会での生活の中で、様々な集団生活を通して、多様な人間関係の築き方や、集団の発展に寄与することや、よりよい自分を追求することなどを学ぶ。」とある。このことから、児童がこれからの社会生活で生きて働く汎用的な力を身に付けることができるよう、特別活動では他者とのよい人間関係づくりや自発的、自治的な活動への参画、自己への理解を深め、自己実現にむけた取り組みが重要になると考える。

『小学校学習指導要領』第6章特別活動では実際の指導について、学級活動内容の取扱い〔第3学年及び第4学年〕指導にあたって特に配慮することとして、「(前略)自分のよさや役割を自覚し、よく考えて行動するなど節度ある生活を送ること」と示している。また、『解説特別活動編』によると、「自分の特徴に気付き、よいところを伸ばし集団の中で生かすことができる活動となるように特に配慮する」とあり、自分の特徴に気付き、それを生かして活動できるように指導の配慮をしなければならない。

これまでの指導を振り返ると、児童に得意な事や自分のよさを想起させたときに、自分の長所について認識していない児童に対し、その児童の頑張っている姿やよさに気づかせる言葉かけをしてきた。しかし、自分のよさを自覚するまでには至っていなかったように感じる。また、自己のよさを生かして活動ができると言われている係活動でも、活動が進まなかったり、振り返りや頑張ったことを認め合ったりするまでには至らず、児童へ達成感や成長を感じさせることができなかった。

そこで本研究では、児童が自分のよさに気づき、そのよさを生かしながら、楽しんで意欲的に活動に参画し、達成感を得ることができるよう、係活動の活性化を図っていきたい。係活動は、児童が自分の好きなことや得意な事を生かしながら、創意工夫し楽しんで活動することができ、自分のよさを発揮させるよい活動である。児童が係活動に意欲的に取り組むことで達成感を得ることができると考える。また、仲間と共にお互いのよさやがんばりを認め合うことでよりよい人間関係を築き、自己有用感を持つことにつながるのではないかと考える。児童が自分の好きなことや得意なことを生かしながら、義務ではなく自ら楽しんで係活動に取り組むためには工夫が必要だと考える。

これらを踏まえ本研究では、特別活動において係活動の工夫を行うことにより、意欲的に活動に取り組み、自己有用感を持つ児童が育成されるであろうと考え、テーマを設定した。

II 研究の目標

特別活動において係活動の工夫を行い、活動を活性化させることで、自己有用感を持つ児童の育成ができるよう実践研究を行う。

III 目指す児童像

係活動において自己有用感を持つ児童

(自分のよさに気づき、そのよさを生かしながら、楽しんで意欲的に活動する児童)

IV 研究方法

- 1 小学校学習指導要領を踏まえ、理論研究を行う
- 2 特別活動において係活動の工夫を行い、自己有用感を持つ児童の育成ができるよう実践研究を行う
- 3 実践研究、事前・事後アンケートの分析を行い、係活動の工夫は目指す児童を育成するのに効果的であったかを確認し、改善を図る

V 研究内容

1 自己有用感について

(1) 自己有用感とは

『生徒指導リーフ Leaf18』（国立教育政策研究所 2011）では、自尊感情と自己有用感の違いについて示しており、「自尊感情」は、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態であり、自己評価で得られるものであると説明している。一方、自己有用感については、「他人の役に立った」「他人に喜んでもらえた」など、相手の存在があってこそ生まれるもので、自己評価であるけれども、他者の評価を得た上でのものであるとしている。

また、栃木県総合教育センター(2013)の子どもの「自己有用感」について実施された調査研究結果によると、「自己有用感は、『存在感(他者や集団の中で、自分は価値ある存在であるという実感)』『承認(他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況)』『貢献(他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況)』の要素で構成される。」と示し、これらの要素が相互に関連しあって高まっていくことで自己有用感が育まれるとしている(図1)。

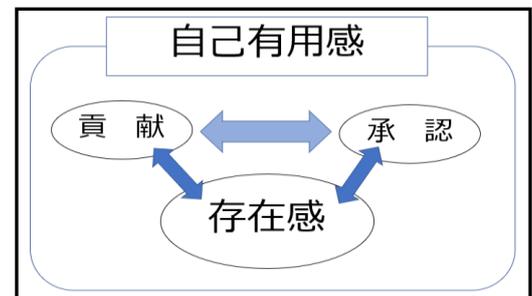


図1 自己有用感を構成する三つの要素
(栃木県総合教育センター(2013)を基に作成)

(2) 特別活動における自己有用感

『解説特別活動編』では、「学級活動は、共に生活や学習に取り組む同年齢の児童で構成される集団である『学級』において行われる活動である。学級生活の充実と向上を目指し、他者と協力したり、個人として努力したりしながら自主的、実践的に取り組むことにより、活動することの楽しさや成就感、達成感を得たり、自己有用感を高めたりすることにつながるものである。」と示している。学級活動の一つである「係活動」を自主的、実践的に取り組めるようにすれば、自己有用感を高めることができるのではないかと考える。また、杉田(2020)は、自己有用感を育むための学級や学校の在り方について、「認め合い、励まし合い、許し合えるようなポジティブな社会としての学級や学校」の必要性を述べている。そのため、本研究でも児童同士の認め合いや励まし合いが行えるように、言葉かけの仕方について確認し、活動の中で活用できるようにしていきたい。さらに

計画実行した係に対して「ありがとうカード」を書いて送る活動で、感謝の気持ちを伝え、自己有用感へとつなげていきたい。

本研究では、児童が活動実践を振り返り、「活動をやってよかったな」「みんなが喜んでくれて嬉しい」「次は〇〇したい」といった達成感や充実感、次の目標に繋げた感想など自己に対する肯定的な評価の言葉が見取れた場合や「自分が行った行動を喜んでくれるだろう。」とみんなから承認されている実感がアンケートから見取れた場合に「自己有用感を持っている」と捉える。

また、『生徒指導提要改訂版』(2022)では、教科指導と生徒指導の一体化した授業づくりにおいて「授業において、児童生徒が『自分も一人の人間として大切にされている』と感じ、自分を肯定的に捉える自己肯定感や、認められたという自己有用感を育む工夫が求められます。」と示しており、自己有用感を育むには「自分が大切にされている」という自己存在感を児童が感じることが大切であるといえる。その自己存在感を与える取り組みについて、『生徒指導リーフ Leaf 6』(国立教育政策研究所 2012)では、「一人一人の児童生徒が、学級・ホームルームのよりよい生活づくりに貢献できるよう、係活動や学級・ホームルーム組織の中で、自分のよさや得意なことを生かして活動できるようにする取組(学級活動・ホームルーム活動)」と挙げている。これらのことから児童が自己存在感を感じ、自己有用感を持つ姿を目指し、本研究では、特別活動の中の学級活動の一つである「係活動」を取り上げ、研究を進めていく。

2 係活動について

(1) 係活動と当番活動の違い

解説特別活動編では、「係活動は、学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている。したがって、当番活動と係活動の違いに留意し、教科に関する仕事や教師の仕事の一部を担うような係にならないようにすることが大切である。」と示している。また、平野(2020)は、係活動と当番活動について、混同されやすいものであるが、目的も活動内容も異なると述べており、二つの違いをそれぞれまとめている(表1)。

表1 係活動と当番活動の違い(平野(2020)を基に作成)

係活動	当番活動
学級生活をより豊かに楽しくするために、児童自らがアイデアを出し合い活動する。	学級生活を円滑に行うために、みんなで学級内の仕事を割り振って行う。
責任は伴わない。 係をやらなくても困らないが、やれば学級が楽しくなる。	責任を伴う。 当番をやらなければ、学級が困る。
児童の創意工夫で行う。	創意工夫の余地がない。
児童主体	教師主導

さらに、『小学校キャリア教育の手引き』(2022)では、係活動の特徴として図2のように挙げている。これらのことから、係活動は、児童自らがアイデアを出し合い、創意工夫をしながら活動を楽しむものであり、その成果が学級に反映されみんなが楽しくなる活動として捉え、本研究でも取り組んでいく。

- 児童が必要とする係であること
- 継続的に活動できること
- 成果が学級に反映されること
- 複数で協力し合って活動できること
- 創意工夫が生かされること

図2 係活動の特徴

(小学校キャリア教育の手引きを基に作成)

(2) 係活動の工夫について

『小学校キャリア教育の手引き』(2022)では、「係活動を活発に行うためには、仲間、時間、空間の三つの間が必要である。」と示しており、仲間との関わり、活動時間の設定、教室環境の工夫等を行うことで係活動を活性化させることができると考える。

① 仲間との関わり

ア 自他のよさについて

『解説特別活動編』では、学級活動「(2) 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」の内容イ「よりよい人間関係の形成」において、育成を目指す資質・能力について「学級や学校において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活することのよさや大切さを理解すること、互いの個性を尊重し合う人間関係を形成することができるようにすることなどが考えられる。」と示している。お互いのよさを見付け、違いを尊重し合ったり、互いの個性を尊重しあったりするためには、まずは、自分のよさについて知ることが必要だと考える。そこで本研究では、自分のよさに気づくための活動、相手のよさを見付け伝える活動を行う。そうすることで、係活動においても自分のよさを振り返りながら活動を計画していけるだろうと考える。

イ 「言葉かけ」について

「言葉かけ」と「声かけ」の違いについて『大辞林』(1995)では、前者は「言葉をかける」とし、「人にものを言いかけたり話しかけたりすること」としている。後者は「声をかける」とあり、「呼びかけたり話しかけたりすること」と意味している。このことから「言葉かけ」は、特定の相手に対して、言葉を選びながら話しかけることと捉えることができる。神谷(2017)は、著書『自己有用感・自尊感情を育てるコーチング・アプローチ』の中で、子どもの自己有用感を高めるうえで不可欠なのが、言葉かけであることを述べている。「子どもにかける言葉が具体的であればあるほど、『しっかり見てもらっている』ということ子どもは強く実感することができるはずです」と記している。このことから、本研究でも教師が児童の様子を見ながら、その児童に合った具体的な言葉を選び「言葉かけ」を行っていく。また言葉の伝え方としてメッセージの主語を「私」にすることで、「子どもにとっては、相手に認められているという充実感を得やすく、自己有用感の高まりが期待できる」と述べている。このことは、精神科医である野田(2017)もアドラー心理学の勇気づけの手法としてあげている。「勇気づけ(エンカレッジメント)」とは、「激励、励ます」であり、積極的に課題に取り組む姿勢を捉え、それに対して「ありがとう」「うれしい」というメッセージを「私は」という言葉から伝えることで、児童はクラスの中に自分の居場所を持ち、勇気づけられる。例えば、「(あなたは)がんばっている」という言葉一つでも「あなたが頑張っている姿を見て、私はうれしくなった」と伝えることで、認められているという充実感を児童に感じさせることができると考える。そこで本研究では、相手に言葉を伝えるときの工夫として「私」を主語にして伝える手法を取り入れ、教師だけでなく児童も活用できるようにしたい。また、「相手の名前を呼んで伝える」という手法を取り入れ、児童に自己存在感を感じさせ、勇気づける言葉をより伝わりやすくさせたい。

ウ 話し合い活動における合意形成について

特別活動における知識及び技能の一つに、「よりよい合意形成や意思決定の方法」がある。多様な意見を認め合い、互いのよさを生かしながら考え、伝え合い合意形成したことに基づき、協働してよりよい生活を築くようにするために身に付ける力である。折り合いをつける手法「折り合いの術(表2)」を児童と確認し、係での話し合い活動等に活用できるようにしたい。

表2「折り合いの術」(那覇市立さつき小学校資料参考)

合体の術	意見AとBを合体し、1つにまとめる。
いいとこどりの術	意見AとBのいいところをとって、1つにまとめる。
生まれ変わりの術	意見AとBから、新しいアイデアにまとめる。
なっとくの術	みんながなっとくできる1つの意見にまとめる。

② 活動時間の設定

『解説特別活動編』では、当番活動や係活動、学校内外でのボランティア活動の指導時間について、「学級活動の授業時数を充てない朝や帰りの時間、当番活動を行っている時間などに行うことが中心となるが、学級活動においても適切に取り上げ、計画的に指導する必要がある。」としている。平野(2020)は、係活動を成功させるポイントとして「活動時間の確保」を挙げており、活動時間を設定していなければ、話し合いなどもうまくできないと述べている。そこで本研究では、朝と昼に10分間の活動時間を設定する。朝の時間では、お知らせ、ミーティングや製作活動、イベント準備などを行う。昼の時間では、係からの案内やお知らせ、活動の振り返り、ありがとうカードの記入などを行っていく。学級活動を行う授業時間では、係から計画されたイベントを行う時間として設定していく。

③ 空間(教室環境の工夫)について

文部科学省国立教育政策研究所から発刊されている『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動小学校編』では、活動の活性化を図る係活動コーナーの工夫として、「係活動に使うものなどを用意し、児童にとって活動しやすい環境を整えたり、活動の様子が学級全体に伝わるような工夫をしたりし、活動意欲を高めます。」と示されている。このことから空間とは、児童にとって活動しやすい教室環境と捉え、係活動コーナーの工夫を行っていく。これまでの活動の様子やこれからの活動計画が視覚化できるように教室背面を活用する。

VI 研究計画

活動を貫くテーマ・・・単元導入時に児童と検討し決定

「係活動を楽しんで、笑顔で自分のよさをいっぱい見つけて広げよう」

時数	活動内容	※指導上の留意点
第1時	①ぼく・わたしのトリセツを作ろう	※自分の好きなこと、得意なことなど振り返ってカードに書き、自分自身について知る。
第2時	②友達のいいとこさがしをしよう	※友達のいいところを見付け伝え合うことで、自分の新たなよさに気づき、自己理解を深める。
第3時	③やる気アップの言葉かけ	※相手を気持ちよくする言葉(ふわふわ言葉)について振り返り、その言葉を使いながら認め合い、励まし合いの言葉かけができるように伝え方のポイント(視線、声の調子、態度)をおさえる。また、言葉かけの仕方としてコーチングの手法である「思ったことは『私』を主語にして伝える」「相手の名前を呼んで伝える」を活用できるようにする。
第4時 事前	④みんなで楽しもう！係活動！！	・係活動について振り返ろう ※今までの係活動での自分の取り組みについて、振り返る。 ・先輩の係活動の様子を見よう ※4年生の係活動の様子を動画視聴し、係活動の意義を捉える。
本時	・係活動で自分がやることを決めよう (導入)4年生の係活動の様子を振り返り、係活動の意義「自分のよさを生かして活動し、まずは自分が楽しむ」に気づく。	

	(展開)自分が好きなことや得意なことを生かして、係活動でやりたいことを考える。係メンバーで意見を伝える中でお互いの意見を認め合ったりアドバイスしたりする。 (終末)自分が係活動でやりたいことを自己決定する。
事後	・係メンバーそれぞれ自己決定したことを共有し、これからの活動計画を立て実践する。 ・活動後はそれぞれの係のよかった点を「ありがとうカード」に書き、プレゼントする。 ・実践を通して良かった点や改善点を振り返り、カードに記入する。
第5時	⑤2年生へ係活動をしようかいしよう
事前	(計画委員)議題ポストを確認し、選定する。活動計画を立て、学級会の準備を行う。 (児童全体)議題を決定し、自分の考えを学級会ノートに書く。
本時	・係活動しようかい会の計画を立てよう。 ※自分の考えを持ち伝え合う中で、多様な意見を認め合い、合意形成することができるようにする。
事後	(計画委員)決まったことの要点をまとめ、掲示する。 (児童全体)各係で準備し、会を実施する。実施後、振り返りを行う。

Ⅶ 研究の実際(結果と考察)

係活動の工夫として仲間(仲間との関わり)、時間(活動時間の設定)、空間(教室環境の工夫)を基にした実践を報告する。また、係活動がうまく進まなかった児童への対応事例について報告する。

1 仲間(仲間との関わり)の工夫について

(1) 活動実践

① 「ぼく・わたしのトリセツを作ろう」

児童に自分の好きなことや食べ物、得意なことやきれいなこと、自分のいいところを振り返り、トリセツとしてカードに書く活動を行った。自分の好きな(嫌いな)ことや好きな(嫌いな)食べ物に関しては、スラスラと書いている児童の姿が見られたが、得意なことや自分のいいところについては、悩んで書きづらそうにしている児童が多く見られた。A児は、なかなか書き出すことができず、教師のサポートを得てなんとか書ける所だけを書いている様子であった。

② 「友達のいいとこさがしをしよう」

友達のよさを見付け伝え合うことで、自分のよさを他者に気づかせてもらう活動を設定した。児童はグループメンバーのそれぞれのいいところを見付け、それを手紙に書き、伝える活動を行った。自分のよさを書きづらそうにしている児童も、今回はスラスラと書き出す様子が見られた。A児も友達のよさを手紙に書いて伝える活動を進んで行っていた。また、友達から自分のよさを伝えられ、うれしそうな表情も見られた(写真1)。A児のトリセツには、友達から伝えられた自分のよさに赤丸で印がされ、視覚的にも自分のよさへの気づきが確認できた(資料1、資料2)。友達から伝えられ、今まで気づかなかった自分のよさに気づく児童が32名中28名いた。4名の児童は、すでに自分が気づいているよさを友達から伝えられており、新たな気づきにはならなかったが、なかには「先生、俺、みんなからスポーツマンって言われた」と笑顔で報告し、自分のよさを改めて確認した様子が見られた。



写真1 互いの良さを伝え合う

あきらめない	ていねい	元気	リーダー的	やさしい
おしゃれ	がまん強い	まじめ	絵が上手	働き者
おだやか	のんびり	正直	落ち着いている	聞き上手
明るい	思いやり	熱心	よく考える	話し上手
楽しい	スポーツマン	挑せん	意見が言える	気がきく
歌が上手	字がきれい	物知り	がんばり屋さん	個性的
センスがいい	手先がきょう	すなお	えがおがステキ	きれいな好き
アイディアマン	あいさつ上手	読書家	たよりになる	おもしろい

(もらった キラリカードをはろう) ↓

資料1 活動前のトリセツ

あきらめない	ていねい	元気	リーダー的	やさしい
おしゃれ	がまん強い	まじめ	絵が上手	働き者
おだやか	のんびり	正直	落ち着いている	聞き上手
明るい	思いやり	熱心	よく考える	話し上手
楽しい	スポーツマン	挑せん	意見が言える	気がきく
歌が上手	字がきれい	物知り	がんばり屋さん	個性的
センスがいい	手先がきょう	すなお	えがおがステキ	きれいな好き
アイディアマン	あいさつ上手	読書家	たよりになる	おもしろい

資料2 活動後のトリセツ

③ 「やる気アップの言葉かけ」

係活動を仲間と関わりながら行う上で、互いに勇気づける言葉かけができるよう「やる気アップの言葉かけ」の活動を行った。児童は、前学年で「ふわふわ言葉、ちくちく言葉」を学んでおり、今回の活動では言葉かけの仕方・伝え方について考え、活動を行った。「自分が言われたら嬉しい言葉」を全体で共有したあと、教師が伝え方のバッドモデルを示すと児童から「声が怖い」「相手を見ていない」「体が向き合っていない」と声が挙がり、伝え方のポイントに気づくことができた。また、「相手の名前を呼んで伝える」「思ったことは、『私』を主語にして伝える」というコーチングの手法を言葉かけのポイントとして紹介した。活動後半には、場面設定をしてペアで「やる気アップの言葉かけ」の練習を行った。練習を行う児童の様子を見てみると、コーチングの手法である「思ったことは『私』を主語にして伝える」言葉かけは、どのように使ったらいいのかイメージができていない様子であった。「相手の名前を呼んで伝える」言葉かけの仕方は、使いやすいようで活用している様子が見られた。活動している中で、聞き手の児童が話し手に対し体を背けている姿が見られたため、話を聞くときの姿勢や態度についても意識させる必要があると考え、教師が聞き手のバッドモデルを示し、聞き手の態度について考える時間を取った。「聞いている人がこういう態度だと、想いは伝わるかな？」と話す中、「伝え方のポイントは、聞き手が気を付けることと一緒に」と聞き手のポイントとして確認することができた。児童からは、これまでの自分を見直し「ポイントを覚えてやりたい」といった振り返りの言葉が見られた(資料3)。

伝え方のポイントは、とにかく相手
の目合わせることと向き合(たいり)は
聞く人の
ポイントでもあなたから次からはそれをお
ぼえていきたいです。次からはちゃんとや
りたいです。

資料3 児童の振り返りの言葉

④ みんなで楽しもう！係活動！！

本題材で育成を目指す資質・能力を以下のようにした。

係活動の意義を理解し、自己のよさを生かしながら学級の一員として活動する中で、互いのよさを見付け、違いを尊重し、協力し合って生活をする事のよさや大切さを理解できることを目指す。また、友達と関わる過程を通して自己理解を深め、互いに協力し合って温かな人間関係を形成しようとする態度を養う。

本時の活動では、自分が好きなことや得意なことなど自分のよさを生かして係でやりたいことを考えた後、それぞれの考えを係で共有する時間を設けた。共有する場では、それぞれの考えのよさや違いを認め合いながら質問したり、まだ考えが決まっていない仲間にアドバイスをしたりし、やりたい活動を自己決定する流れで行った。書きたい記事がなかなか決まらずにいた新聞係のB児が、他の係児童とやり取りをしている場面があった。そこでは、他の係児童がB児の考えを引き出す言葉かけを行っている様子が見られた(図3)。B児の様子を見て周りの児童が寄り添いながら言葉かけをしていく中で、B児も自分の考えをワークシートに書いていた(写真2)。また、生き物係のメンバーは、それぞれが考えたやりたいことを伝え合う中で、友達の意見を認め合いながらも思ったことを伝え、話し合う様子が見られた(図4)。

C1: B児は何がしたいの？
B児: (意思表示できず黙っている)
C2: 俺たち係、どんなことやったら楽しいと思う？
B児: (無言)
C3: 俺たちがB児にアドバイスしたらいいんじゃない？

図3 児童の話し合いの様子



写真2 自分の考えを書くB児

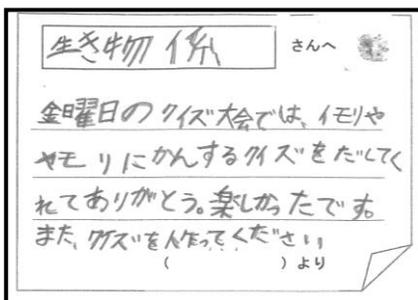
事後の活動では、係での話し合いが進まずに実践にうつることのできない係が出てきた。9名構成のダンス係では「かっこいい曲でダンスを踊りたい」という意見が共通点

であったが、選曲で意見がまとまらず、話し合いをずっと続けている様子であった。教師から「グループを分けて、曲を変えてもいいかも」という言葉かけをすると、4名と5名のグループに分かれて活動を始めた。また、10名構成の生き物係は、リーダー的存在の児童が長期欠席し、活動が進まず停滞している状況が見られた。教師からは「休んでいるメンバーがいても、できることを進めておこう」と言葉をかけ、活動を促したが、不安げな様子であった。

イベントを開催する係も出てきたため、開催後は、その係へ「ありがとうカード」を書いて送った(資料4)。そのメッセージには、「クイズを出してくれてありがとう。楽しかったです。」といったお礼の言葉や「ドッジボール大会では、とても活躍していて、すごかった」といった頑張っている姿を認める言葉などが書かれていた。また、同じ係の児童同士、お互いの頑張っていた姿を認め、メッセージを書いて、プレゼントした(写真3)。張り出したメッセージを嬉しそうに読み返す児童の姿も見られた(写真4)。

C4：俺は、アリの迷路を作りたい
 C5：アリって段ボール上らない？
 C4：だったら青虫。
 C5：青虫はこの時期いないよ。
 C4：だったら屋根作る。
 C5：中が見えないよ
 C4：だったらプラスチックで作る。
 C5：ペットボトルだったらできるかも
 C6：たしかに
 C7：ダンゴムシは？
 C5：たしかにダンゴムシ！
 C4：ダンゴムシ、いる？
 C5：レンガの下とかにいるよ。

図4 異なる意見を認め合う話し合い



資料4 「ありがとうカード」



写真3 掲示する児童

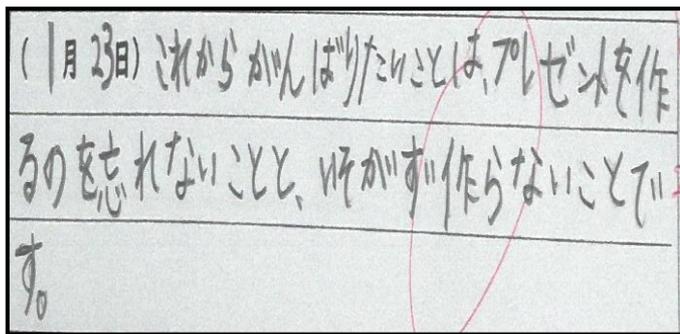


写真4 カードを読み返す児童

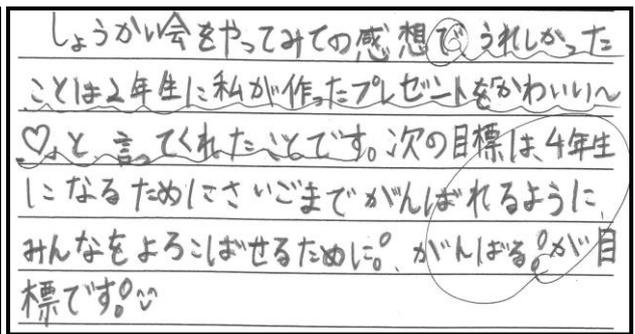
⑤ 2年生へ係活動をしようかいしよう

「係活動しようかい会」の計画を立てるための学級会では、「場の設定」について話し合い、「お祭りブース型」と「ステージ発表型」の2つの意見に分かれた。それぞれの案の「いい」「悪い」の話し合いで対立してしまった。司会から「意見をまとめられないか」と促した後、D児から「全体の術でどちらもできるといい。ステージ型で聞き逃しても、お祭りブース型でまた聞くこともできる」という意見が出た。折り合いの術(表2)を使い、どちらの意見のよさも生かせないかと考え、発言した姿に、他の児童から「なるほど！」と承認の声があがった。事後の活動では、「2年生への係活動しようかい会」の日がせまるにつれ、どの係も活発に活動するようになっていった。意見対立が多かったダンス係も、振付のアイデアを出し合いながら、協力して作り上げている様子も見られ、休み時間に練習する姿も多くみられるようになった。また、リーダー的児童の欠席でなかなか活動が進まなかった生き物係も、クイズグループ、生き物紹介グループに分かれて活動し、学級のみんなにクイズ大会を実施することもできた。

係活動の定期的な振り返り(資料5)では、できなかったことを基に次への目標を書いている児童が15名、自分ができたことについて書いた児童が9名、「頑張ってよかった」と達成感の言葉を書いている児童が7名いた。他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしていること(貢献)を表現する振り返りを書いている児童はいなかった。一方「係活動しようかい会」後の振り返りでは、32名中29名の児童が、「2年生が喜んでくれてうれしかった」「今度は、別のクラスにも紹介したい」など自己有用感につながる振り返りを書いていた(資料6)。残り3名は、自分が頑張ったことを書いていた。



資料5 係活動の定期的な振り返り



資料6 「係活動しょうかい会後」の振り返り

【考察】

「ぼく・わたしのトリセツを作ろう」の活動では、自分のよさを書きづらそうにしている児童がおり、自分に対する評価が低い（自尊感情が低い）状態であると分かった。他者によって自分のよさに気づかせてもらうきっかけとして、「友達のいいとこさがし」の活動を行った。そこでは友達のいいところを見付け伝え合うことで、自分では気づけなかった自分のよさに気づき、自己理解につながった。「やる気アップの言葉かけ」において、言葉の伝え方、話の聞き方のポイント（視線、態度、声の調子）を学んだことで、仲間との話し合いの際、向き合って話し合う姿が多く見られるようになった。また、「みんなで楽しもう！係活動！！」の取り組みの中でも、友達の様子を見て寄り添って言葉をかけたり、友達の意見を大切にしながら自分の考えを伝え合ったりする姿が見られたことから、「やる気アップの言葉かけ」の取り組みを行ったことで、児童が「相手を大切にする」という意識を持つことにつながったのではないかと考える。しかし、言葉かけの仕方ではコーチングの手法（思ったことは『私』を主語にして伝える）は、児童にとっては活用しづらく、効果的ではなかった。

係活動では、「自分のよさを生かした」係とするために、児童は自分の好きなことや得意なことを生かして活動することができるように目標を立てて実践した。実践当初から活発に活動している係児童をみると、「みんなでドッジボールをして楽しみたい」「誕生日の人を喜ばせたい」など自分も楽しいが、「みんなのためにも」を目的とし、相手意識を持って活動していた。「2年生への係活動しょうかい会」の計画が具体的に決まってきてから、どの係も活動が活発になったのも「2年生」という相手意識が明確になったからだと考える。「自己有用感」は、相手の存在があってこそ生まれるもの」ということは、「みんなのために」を目的として活動している姿は、自己有用感を高めようとしている姿であり、「みんなが楽しんでくれた」「喜んでくれた」という充実感や達成感を感じた時に「自己有用感を得た」ということにつながると考える。活動後のみんなからの「ありがとうカード」も笑顔で読み返している姿をみると、自分が行った行動で相手が喜んでくれたことに「うれしい」という実感を得るのに効果的であったと考える。児童の活動後の振り返りの言葉を見てみると、「2年生への係活動しょうかい会」後の振り返りで、達成感や喜んでもらった喜びや嬉しさなどの記述が多いことから、「係活動しょうかい会」という発表の機会（時間）が係活動を活発にし、自己有用感を持つ機会になったと考える。

2 時間（活動時間の設定）について

(1) 朝・昼の10分間の設定

朝の10分間は、係からのお知らせや係のミーティングとして活動を行った（写真5）。昼の10分間は、生き物係、レク&スポーツ係からのクイズ大会のイベントを開催したり（写真6）、「ありがとうカード」や活動の振り返りを書いたりする活動を行った。

(2) 昼休み時間や特別活動の時間の設定

屋外スポーツイベントを企画する係は、全員参加型と自由参加型のイベントを開催した。全員参加型のドッジボール大会は特別活動の集会活動として設定し、自由参加型の「しゅりけんべー遊び」のイベントは、昼休み時間に開催した。また、「2年生への係活動しょうかい会」の準備を行うにあたり特別活動の時間をとり、活動を行った（写真7）。



写真5 朝、お知らせをする係児童 写真6 昼、クイズ大会を開催 写真7 特別活動の時間の活動

【考察】

屋外でのイベントは、昼休み時間や特別活動の時間を設けることで、みんなで楽しんでいる様子が見られた。朝・昼の10分間の活動時間では、係メンバーが集まった活動自体はほとんどできず、打ち合わせやお知らせ、ミニイベント等などに活用できた。設定時間以外の時間では、昼休み時間に活動している児童が数名いる程度であった。「2年生への係活動しようかい会」の日が近づくにつれその数は増えていった。それは、「準備しなければいけない」といった意識からくるものではないかと考える。児童自らが「係活動をやりたい!」という思いを持ち、活動時間も自ら計画立てて活動できることが理想的だと考える。

3 空間(教室環境の工夫)について

教室環境の工夫として、係活動で使用する画用紙や折り紙などの道具をいつでも使えるように準備した。また教室背面を活用し、各係からの活動状況の報告や実施後の振り返り、「ありがとうカード」などを掲示できるようにした(写真8)。掲示をすることで、児童が自然と立ち止まり各係からの報告を見たり、「ありがとうカード」をいつでも貼ったり、見たりする姿が見られた。

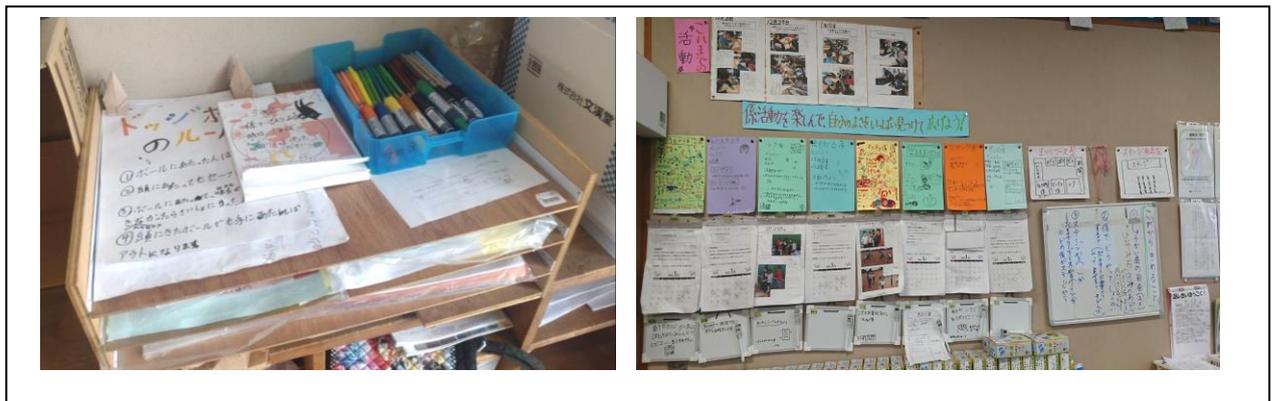


写真8 係活動コーナーの工夫

【考察】

立ち止まって掲示物を見る児童が出てきたことから、自分以外の係の活動について興味関心を持ち、掲示されている「ありがとうカード」を見ることで、自分のよさや頑張った姿を振り返ることができたと考える。また、係活動に必要な道具をいつでも使用できるようにしたことで、児童の思いのままに活動を進めることができたのではないかと考える。

4 活動がうまく進んでいない児童への対応事例

(1) A児とのエピソード

A児は自分に自信が持てず、人前に出ることを好まない児童であるが、友達想いで誰にでも優しく接することができ、みんなから慕われている。そのA児とのエピソードである。

A児とのエピソード

「2年生へ係活動しようかいする会」では、ダンス係のA児は「みんなと一緒に踊る」と言っていたが、いざ本番を迎えると2年生の前へ出ることができなかった。会が盛り上がるにつれ、次第に係の輪から離れてしまった。そこで、教師から「A、ダンス係の写真を撮ってもらえないかな」と言葉をかけた。するとA児からは「先生、動画にしますか？ほかの係も撮影しますか？」と勢よく返答があった。「活動したい」と思っていたからこそ出た発言だと考える。係のみんなとは活動はできなかったが、「人のために」と考えて行動している姿を見ることができた(写真9)。



写真9 動画撮影するA児

(2) B児とのエピソード

自分の考えを意思表示することに時間のかかるB児は、新聞係で自分がやりたいことを決める際に自分の考えを言えずにいた児童である。仲間との対話後に「カービーの漫画を描きたい」「取材とかもいいかも」とやりたいことが決まったが、具体的な計画までは立てきれず行動できずにいた。その時のエピソードである。

B児とのエピソード

教師から「Bは、どんなこと書きたい？」と言葉をかける。「マッジョ系のドッジボール大会について書きたい」と返答。「いいね〜！」と認める言葉かけをした。しばらく見守るとすらすらと書き始めた。この調子でいけば！と教師は思った。B児の手が止まった。ネタが尽きたのかなと思い、「続きはどうする？」と言葉をかけると、B児はすっと立ち上がり、マッジョ系のところへ。何やら話しかけている。自分の席に戻ってきたB児は、「マッジョ系の声を聞くと」と再び書き出した。B児は取材をしていたのだ。B児は具体的な計画は立てられなかったが、自分がやりたいと思っていたことを実行していた。新聞用紙の半分を書き終えたところで、次は何を書こうか悩んでいる様子であった。教師から「カービーの漫画を書きたいって言ってたよね！それを書いてみたら？」と提案した。しかし、B児が書いたのは、「都市伝説」という見出し。B児は「今、書きたい」と思ったことを自己判断し決定していた。やっと書き終えたB児は「かけた！」と笑顔だった(写真10)。



写真10 新聞を完成させたB児

【考察】

活動がうまく進んでいない児童に対して、教師がその児童の様子を把握し言葉かけを行った。A児の場合は、A児の特性を認め、彼ができることを促した言葉かけが効果的であったと考える。また、B児の場合は、強い自分の考えを持っているので、「どうしたい？」と自己判断を導く言葉かけと「いいね！」と勇気づける言葉かけが有効だったと考える。教師からの個に応じた言葉かけが、その児童に「自分はありのままの自分でいい」という自尊感情を高めることに繋がり、その児童が安心して自分らしく活動に取り組むことができたのではないかと考えられる。

VIII 研究のまとめ

ここでは児童の自己有用感に関する検証前と検証後のアンケートの比較を行う。自分が取った行動で、クラスの人が喜んでくれたと感じた児童の割合(図5)は、「ある」と答えた児童が検証前より13.6%増加した。検証前は「喜んでくれたことがない」と答えた児童が3.1%いたが、検証後では、0%になった。しかし、「どちらかというもない」と答えた児童が0.6%

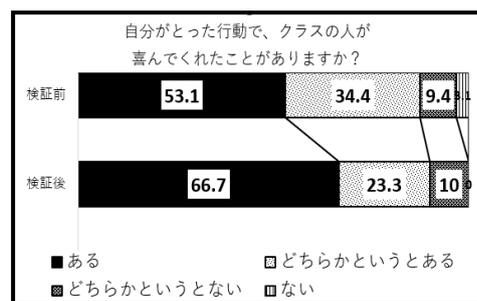


図5 貢献感情を見取るアンケート結果

増加していることから、喜んでもらえたと強い実感を得てない児童がいると考える。「ありがとうカード」だけでなく実際の言葉かけが必要であったと考える。また、これから自分がやろうとすることをクラスの人には喜んでくれると思う児童の割合は(図6)、「喜んでくれる」と答えた児童は、検証前より4.6%減少し、「喜んでくれない」と答えた児童が6.6%増加した。そう答えた児童を分析すると、活動がうまく進まなかった生き物係メンバーであった。彼らに対し、教師から「休んでいるメンバーがいても、できることを進めておこう」と言葉をかけ活動を促したが、不安げな様子であったことから、その際に彼らの不安を理解し、解決に導く言葉かけが必要だったと反省する。彼らは「係活動しようかい会」ではしっかり活動が行えていたが、振り返りの言葉には次回、頑張りたいことが書かれていた(資料7)。今回の活動では達成感を得ることが出来なかったゆえに、ネガティブな回答をしていると考えられる。教師から児童に対し「自分達は頑張った」という自尊感情を持つことにつながる言葉かけや、思うように活動が進まなかった状況を互いに許し合えるような仲間との関わりを持たせる支援が必要だったと考える。

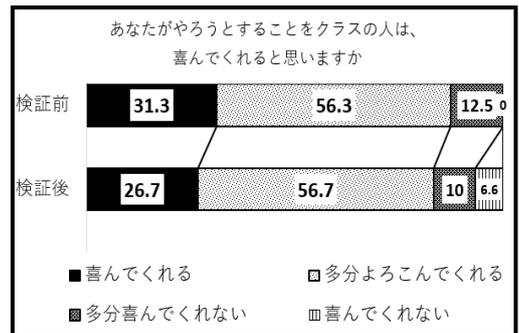


図6 承認感情を見取るアンケート結果

大きな声をたす(目標)つまが
りたりとは、かがりていで
きながったの大きき大まりま
でたあーくさんかんはっ
てりたりとおもひまし
た。

資料7 児童の振り返りの言葉

Ⅸ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 係活動において仲間(仲間との関わり)、時間(活動時間の設定)、空間(教室環境の工夫)の3つの間を設定することにより、児童は自分のよさに気づき、係活動でやりたいことを自己決定し、仲間と互いの意見を認め合いながら協力し活動することができた。
- (2) 「係活動紹介会」という発表の機会(時間)を設けたことで、児童が意欲的に係活動に参画し、活動をより活性化させ、成し遂げた時の充実感や達成感を味わい、自己有用感を持つ児童が増えた。
- (3) 「ありがとうカード」(仲間、空間)の活動に取り組んだことで、児童は自分が行った行動で相手が喜んでくれたという実感を得ることができた。

2 今後の課題

- (1) 児童がより主体的に活動できる手立ての工夫(ワークシート、話し合う視点の明確化、時間の確保)。
- (2) 児童が自他ともに許し合える関係を作ることができるような働きかけの工夫。

<主な参考文献>

- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編) 文溪堂 2019年』
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版社 2018年』
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館出版社 2018年』
- 神谷 和宏 『自己有用感・自尊感情を育てるコーチング・アプローチ』 明治図書 2017年』
- 野田俊作 荻雅子『アドラー心理学でクラスはよみがえる』 創元社 2017年』

<参考文献 URL>

- 栃木県総合教育センター
『高めよう！自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～』2022年11月8日取得
https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/index.htm

本検証授業研究会の記録

本検証授業実施期日：令和5年1月12日（木）

検証の視点	○係活動の意義を理解し、自分のよさを生かしながら活動できるように、自分なりの目標（自分がやりたいこと）を立てることができていたか。
-------	---

1 研究協議

- 参 観 者 生き物系の児童は、友達との交流のあと自分がやりたいと考えていたことを変えていて、「どうして変えたのかな？」と聞いたら、「友達の意見を聞いて面白そうだなと思った。」と言っていて、自分の意見が通らなくても面白いというアイデアに結びついてストンと納得し、お互いの意見を共有してこれからの方向性をきめていくといういい話し合いを行っていた。
- 参 観 者 自分がやりたいことを「なんて書けばいいのだろう」といった表情で書けない児童がいた。彼は新聞係で構成員は本人一人だったが、係メンバーで集まって共有する時間に、別の係児童と共有していた。その係児童が、彼の考えを引き出す声かけをしていた。そのやり取りのあとに、本人は自分がやりたいことを考えて書くことができた。理論で研究している「仲間」というところが結びついていて。
- 指 導 主 事 欠席児童の子の名を取り上げて、その子のやりたいことを例とした理由を教える欲しい。自分がやりたいことは自分で決めるという授業のねらいとズレているように感じた。また、話し合い活動がもうちょっとあるのかなと思っていたが、今日の流れは想定通りだったのかを聞きたい。
- 授 業 者 欠席児童の名を取り上げたのは、昨日まで出席していたので、彼女も今日の授業に参加したかっただろうという想いと、自分のトリセツを使いながら考えることもできるよということを伝えようと考えた上だった。話し合い活動については、たっぷりとする予定だったが、前半で児童の発言を導くことに時間がかかってしまった。タイムマネジメントがうまくいかなかった。
- 指 導 講 師 検討会時に、児童に存在感を持たせることについて話題になり、欠席していても教室でその児童の名を出すことで、その児童にとっても周りの児童にとっても存在感を感じさせることができるのではないかということだった。

2 講 評

南城市教育委員会 教育部参事 與儀 毅

- 学級経営の温かさがあり、一時間の授業のやり取りを見ていてもとても丁寧だった。
- 特別活動、大切なんだけどなかなか時間を確保できないというのが各学校の悩みなのかなと考える。今回の授業がモデルケースとなり、広がっていけばいいなと思う。
- 特別活動の「なすことによって学ぶ」は、一つ一つの活動を積み重ねていくことによって、次の活動に生きていく。今回のクラス児童が自分達のクラスを楽しくすると取り組んでいることが将来社会に出たときに、自分のよさを生かしながら社会をよりよくしていくところに繋がっていくだろう。
- OECD がラーニングコンパスとして示しているエージェンシー。他人事ではなくて、自分事としてあらゆるものを取り入れて、児童生徒、教師、保護者も主体になるというのが、全世界のキーワードとなっている。その自分事で進める授業が今後も生きていく。
- 指導講師として関わって改めて特別活動のよさというのを再確認した。学校経営の中で本当に中核になる「誰一人取り残さない」というところを大事にしてほしい。
- 課題として手立てと 45 分のタイムマネジメントをどのようにしていくのかという新たな課題に対して学びを深めていってほしい。